九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# [033] 中国文学論集表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/9906

出版情報：中国文学論集. 33, 2004-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

# 編集後記

遅ればせながら、二十一世紀は「何」の時代であるのかを考えた。

二十世紀が欧米主動による「技術」の時代であったとするならば、来たる一百年は何が最も求められるであろうか――私は、これを「知恵」の時代であると推測したい。

もちろん、我々の生活のさまざまな場面で、これからも常に最新の「技術」が求められ続けるには違いない。しかし、イラク紛争を主とする幾多の国際問題、中越大震災など各種のいたましい災害やかなしい犯罪の報道に接するたびに、これからの私達に必要なものは、ただ単に人の手を離れ、機械化、そして効率化のみを至善とする「技術」偏重の社会ではなく、さまざまな危難や困難に即して柔軟に対処し、隣り合う者同士のさまざまな利害の衝突を極力少なくするための「知恵」であると思うのである。

一方、我々の国語教育の中で今や「漢文（中国古典）」の占める割合は徐々に（しかもある部分では目に見えて）少なくなりつつある。これは一つには約四半世紀前頃からの大きな世論――知識偏重の過酷な受験競争に対する反省から、「むずかしいもの」「現代社会から縁遠いもの」を切り棄ててゆこうという意見に従った措置である。だが思い返してみよう。中国古典は本当に「むずかしく」、我々の日常生活に「縁遠い」ものであったろうか。目先の利益に意地汚く固執する人間の醜態を我々は「漁父の利」の話に悟り、窮地に陥った際の心の解放を「塞翁が馬」の故事に求めたことはなかったか。また白楽天や蘇東坡の後半生の詩文を見れば、病に衰え老いに怯える自己の心身を認めつつも、大きな時空の中に確乎としてある自分という存在を、実にクールな微笑とともにこれをもう一度捉え直し、読む者をも励ましてくれるものがあるではないか。

『中国文学論集』第三十三号は、後漢から清朝に至る少壮気鋭の論文・訳注を八篇、そして高校漢文教育の現状を考える四篇の報告を収める。前号に続いて一五〇頁を超え、当会としては破格の大冊となった。しかし、我々の将来を考える上での重要な号となったことは、一編集子としてもよろこびにたえない。

（静永）